

「思いわずらいからの解放」

—マタイによる福音書講解説教 31—

詩篇 第55篇 22節  
マタイによる福音書 第6章 24節～34節

説教 岡村 恒 牧師

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(33節)主イエスは、弟子たちに祈りをお教えになり、続いて、神の前をどのように歩くことができるかお話しになりました。

25節は、「それだから」という言葉で始まります。私たちが自分自身を、天に蓄えられた宝そのものとして発見する時、地上の、目に見えるものに縛られて生きるのではなくて、ただ神にだけ全身全霊を傾けて生きることができる、と主イエスは宣言して下さいます。

「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらう」(25節)のが私たちの姿です。衣食住の問題はいつでも切実です。しかし主イエスは、「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。」(マタイによる福音書 第6章8節)と宣言されました。父なる神は、私たちの必要をご存知なのです。主は私たちを、思いわずらいから解放して下さいます。

かつてエジプトから解放されたイスラエルの人々は、モーセに導かれて荒野に出た途端、食べ物と飲み物のことで不平を言い始めました。神は、天から食べ物と水を与え、40年間、神の民を直接養って下さいました。しかし神の民は一旦約束の地に入ると、すぐに地上の豊かさを目を奪われ、欠乏に心を動かされ、土地の偶像を拝み始めました。この姿は、今ここにいる私たちの姿と重なります。御言葉を聞いて、神に信頼して歩みたいと願いながら、地上の思いわずらいに心をとらわれてしまいます。

主イエスは、「空の鳥を見るがよい。」と言われてすぐ、「あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。」(26節)と語りかけて下さいます。鳥たちを養っておられるお方は、「あなたがたの天の父」だと言われるのです。私たちは、父に愛されている自分を発見して、自分自身を愛することを学びます。そうして神を愛し、隣り人を愛して生きようになります。

思いわずらうことは、実は無駄なことなのです。「あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。」(27節)と言われた主イエスは、この前の5章でも、「あなたは髪の毛の一すじさえ、白くも黒くもすることができない。」(5章36節)

と言われました。父なる神は、私たちの髪の毛の一すじまでご存知です。だから、私たちが自分の力を越えて思いわずらうことは無駄なことです。神から託された責任を果たし、それ以上のことは神にお委ねすることを私たちは知っています。

また、24時間、休むことなく私たちのために働いておられる神を信頼する者にとって、無駄に思いわずらうことは、この信頼を失うことを意味します。〈あなたは私の目には高価で貴い〉(イザヤ書 43章4節)とまで宣言して下さいする神に、私たちは信頼して良いのです。神の愛は、神の側の計り知れない犠牲をもって注がれた愛です。ひとり子、主イエスの命を与え尽くして下さいした程の愛なのです。

「ああ、信仰の薄い者たちよ」(30節)という言葉の主イエスは、嵐に翻弄される船の中で(8章26節)、主イエスを見て水の上を歩き始めながら恐れに捕らわれて沈み始めたペテロに向けて口にされました(14章31節)。聖書の御言葉を忘れ、主の食卓から離れてしまう時、私たちは地上のことに心を奪われて思いわずらいます。主イエスは、主イエスだけを見つめて、思いわずらいから解放されて生きて良いと言われる。主イエスを、自分の救い主として信じて、神の支配(国)を待ち望み、神の顔(義)の前に立つ日を心待ちにして生きようと、私たちをお招き下さっています。

もう既に神の救いの力が発揮され、約束が実現しています。神の国(支配)が私たちを死と滅び、絶望から解放して下さいました。信仰とは、この事実を認め、受け入れることです。神の深いご慈愛が私たちを包み込んでいます。私たちが一瞬として目をそらすことのない天の父に、私たちは信頼し続けて歩んで良いのです。

繰り返し神以外のものに心を奪われてしまう私たちのために、主は食卓を用意して下さいました。救いの確かさを目で見、手で触れ、舌で味わいながら、神に信頼して歩むことができるようにして下さいました。主イエスの命が、私たちの体を生かし、魂を新しくして下さいます。神の国と神の義とが、私たちをとらえ続け、包み込んでいます。主イエスは私たちを、神から引き離す思いわずらいから解放し、本当になくならない命を握りしめて歩む者として下さるのです。

(記 岡村 恒)